

丹後半島における古墳時代前期の
土器様相についての予察

桐 井 理 揮

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

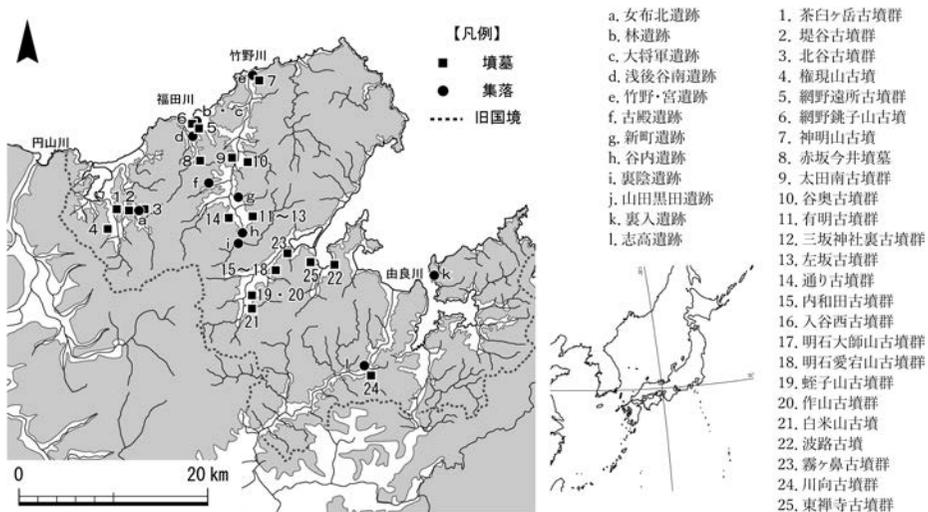
丹後半島における古墳時代前期の 土器様相についての予察

桐井理揮

1. はじめに

京都府北端に位置する丹後半島は日本海側に突き出す半島で、現在の行政区分では京丹后市、宮津市、与謝野町、伊根町が含まれる。古代に置ける丹後国の範囲は、さらに舞鶴市および福知山市の一部が含まれる。本論では、この丹後半島周辺(以下、丹後とする)における古墳時代前期の土器を議論の遡上に載せることにしたい。

古墳時代前期の丹後は、蛭子山1号墳、神明山古墳、網野銚子山古墳に代表されるような、日本海域でも屈指の大型古墳が集中する地域であり、多方面から研究が行われてきた。しかし、土器編年については未だ検討の余地が多い。その要因としては、資料がほぼ墳墓出土資料に限られるという資料的制約のほか、在来系統の土器群の解体に伴い、一括資料中に多系統の土器が混在することにより、独自の土器群の把握が困難であったことが挙げられる。この問題に対し、前稿では弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器を系統毎に整理し、浅後谷南式を4期に再編する案を提示した^(注1)。本論では、古墳時代前期を対象に、系統ごとに土器の型式変化を再検討し、丹後の土器様相について見通しを述べたい。



第1図 本論で対象とする遺跡

2. 丹後半島における古墳時代前期の土器の系統

丹後では、弥生時代後期後葉に発達した擬凹線文土器様式が展開する。高野陽子が西谷式と定義したこの土器群は極めて独自性が強く閉鎖的な土器様式である。^(注2)後続する浅後谷南式は擬凹線文土器様式の解体期であり、在来系統土器群は低調になるいっぽうで、北陸系統、山陰系統、畿内系統の土器群が流入する。筆者は前稿でこの様相の整理を行い、浅後谷南式を4期に再編した。高野は続く古墳時代前期の土器にも言及しており、各期の一括資料を挙げて、それぞれに霧ヶ鼻式(布留1～2式)、北谷式(布留2式)、神明山式(布留2式新相)、大田南式(布留3式)といった並行関係を想定した。これによって、一括資料の畿内との対応関係が示され、山陰系統土器が徐々に主体となっていくことが示されたが、シンポジウム資料集の中で示されたという性格上、提示された様式の内容がやや概念的で、個別の器種の変化の方向性は示されなかった。^(注3)

本論では、高野が重視した土器群の系統を念頭に置き、一括資料を軸にして、その中でみられる土器の系統を認識した上で各器種の型式変化を示し、それを時間軸に還元する方法をとりたい。当該期の丹後においては、①弥生時代後期から継続する在来系統の土器群、②弥生時代終末期に顕著となる北陸南西部系統の土器群、③弥生時代終末期に顕著となる山陰系統の土器群、④古墳時代になって顕在化する畿内系統の土器群、の4系統の土器群が主に認められる。なお、次山淳や三好玄の研究により、古墳時代前期の畿内の土器群は、中部瀬戸内に技術系譜を持つⅠ群と、山陰に技術の系譜を持つ布留系統のⅡ群に整理されているが、^(注4)当地域で主体となる畿内系統の土器群は布留式に由来するⅡ群の土器群である。両者は前期前半には明確に区別できる場合が多いが、前期後半以降は区別が難しく、山陰系統土器群と畿内系統土器群の区別さえ認識できないものも多くなる。その場合はあえて系譜を追求せず記述することもある。また、丹後の中でも地域的な偏差が内在する可能性はあるが、本論では一括して記述を進めたい。

3. 小形器種の系統と時間軸

当地域では墳墓出土資料が多数を占めることはすでに述べた。本節では、供献土器として出土量が多くセット関係が分かりやすい小形器種を取り上げ、検討を行うことにしよう。

高杯の検討 丹後では、浅後谷南式以降、北陸系統の有段口縁高杯が主体であり、そこに在来系統の高杯が少量組成する。古墳時代前期になると、屈曲部が明瞭な畿内系統の有稜高杯や山陰系統の高杯が増加するが、主体となるのは後者である。

山陰系統高杯は、杯部や脚裾部の屈曲が明瞭ではないもので、調整には原体幅の広い縦ミガキ、あるいはハケメやユビナデを多用する。また、円盤充填技法が用いられ、杯部内

面の直径3mm程の刺突も特徴である。

古墳時代前期において高杯の型式変化は明瞭で、三好や松山智弘らによる各地で検討の実践例がある。三好は畿内地域におけるI群系の有稜高杯について、杯部径の縮小と脚部の長脚化という変化の方向性を示し、それが布留式中段階から跛行的に進行することを指摘した。松山は三好の論を引きつつ、山陰系統高杯についても同じように杯部の縮小と長脚化が起ることを指摘しており、長脚高杯の出現を小谷3式新段階とする。^(註5)

丹後において、山陰系統の短脚高杯は北陸系統高杯の末期的なものと共に伴っており、3期にはすでに出現している。後続する時期は、高杯の組成が分かる良好な資料がないが、北谷1号墳では、布留式中段階新相に並行する時期の小形丸底壺に伴って、畿内系統の長脚高杯と、山陰系統の長脚高杯および短脚高杯が共に伴っており定点的資料となる。長脚高杯は、北谷1号墳が初出であり、長脚高杯出現の時期も、畿内・山陰と同調した動向と考えられよう。また、杯部径が小さい

高杯のみで占められることから、先に松山の研究を取り上げたように、丹後でも前期前半に杯部の縮小現象が進行したと考えられる。後続する大將軍遺跡SX01は、山陰系統高杯は長脚のみで、中期的な屈曲部に稜を持つ高杯の共伴を確認している。

各系統の高杯の共伴関係から、当地域においても、各型式が周辺地域と同様の型式変化を想定することができ、第2図のように高杯の組成と変化をとらえておきたい。

器台の検討 器台で主体的に認められるのは、在来系統の小形器台と、山陰系統の鼓形器台および小形器台と、畿内系統の小形器台である。

在来系統の小形器台は受口状の口縁部にスカート状に広がる脚裾部を持つもので、前稿



第2図 高杯の系統と共伴関係

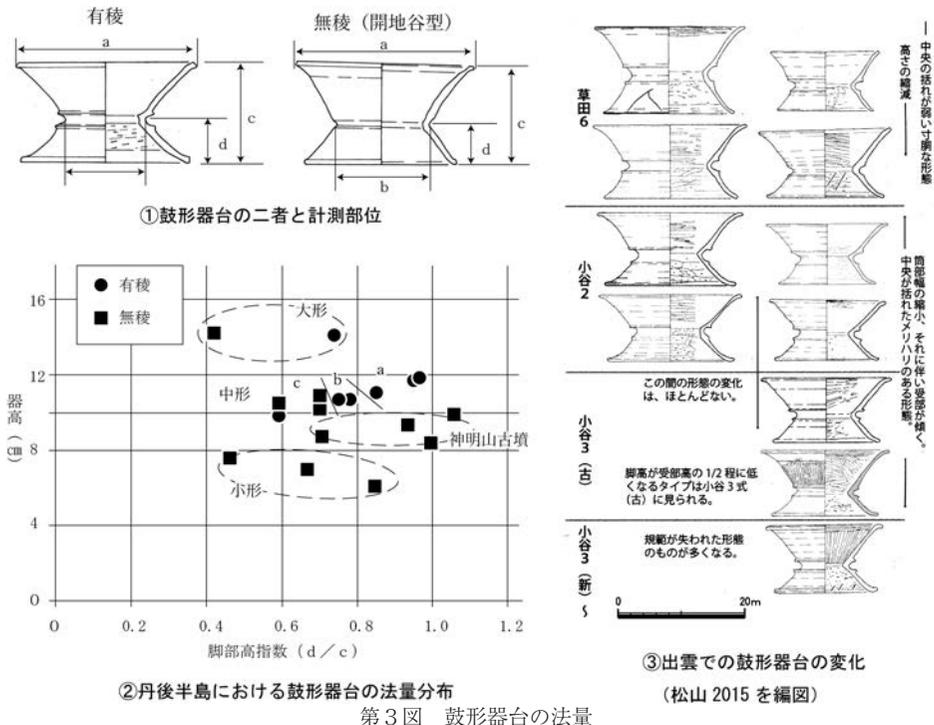
で在来系統小形器台Cとした、器高に対して口縁部の立ち上がりが短いものである(第5図8、14など)。在来系統の小形器台は古墳時代前期のなかでの型式変化は追にくいものの、愛宕山3号墳では小形X字型器台と共伴する。小形X字型器台は畿内では布留式中段階古相に出現するとされており、この段階までは確実に組成する。^(注6)

器台の主体となるのは山陰系統の鼓形器台である。鼓形器台は2期には出現し、その後古墳時代前期を通じて丹後における器台の中心的な器種となる。鼓形器台はその型式から①屈曲部に稜を持つもの(有稜)、②屈曲部に稜を持たないもの(無稜)に大別できる(第3図①)。鼓形器台の変遷観は、山陰地域で松山が示したものを参考にすると(第3図③)、草田6期から小谷2式にかけて器高の縮小が認められ、器高に対して脚部が短いものが小谷3式古段階に出現する。また、小谷2式以降は筒部径が縮小するとされるなど、時期は限定されるが明瞭な変化を見せる器種である。^(注7)

また、いわゆる開地谷型とされる無稜タイプは、山陰地域でも出現時期と分布には偏りがあり、山陰東部では小谷3式新段階に古段階に出現する一方で、山陰西部では小谷4式に出現する。丹後において、両タイプの共伴事例としては権現山古墳GM2や、大將軍遺跡SX01の事例を挙げることができる。短脚の山陰系統高杯と共伴する権現山古墳GM2の開地谷型鼓形器台は、屈曲部にわずかに稜の名残が認められるため、開地谷型器台としては古相を示していると考えられ、丹後におけるこの型式の初現期と考えて大過ない。この資料は後述するように小谷3式に並行すると考えており、無稜タイプの出現は、山陰東部との大きな時間差はないと考える。なお、山陰地域では、この型式の器台は主体となることはないが、丹後や豊岡盆地では前期後半以降は数量が増加しており、分布の中心は山陰東部から丹後にあると考えられる。

第3図では、丹後出土品で、図上で完形となるものを対象として、①のように各法量の計測を行い、その相関関係の検討を行った。その結果、口径(a)やくびれ部径(b)は、古墳時代前期後半の規範の崩れたものを除くと、個体による差異が極めて少ないことが判明した。山陰地域では小谷3式以降は筒部や口径の縮小傾向が顕著であるが、丹後ではこの傾向は、顕著ではなく、時期による差異はあまり反映しない。一方で、器高(c)および脚部高(d)は、いくつかのまとまりに分離可能であり、変遷を追うことが可能であった。したがって、②には器高と、脚部高指数(脚部高/器高の比率)を示した。

器高から見ると、10cm以下の小形品、10~12cmの中形品、12cmを超す大形品に大別される。中形品の中でも、11cmあたりに法量の分化(中形a—b間)を認めてもよいだろう。^(注8)中形品の法量分化は山陰地域でも認められた器高の縮小による時間差を反映しており、小谷2式あたりまでは山陰地域と同様の変化を想定することができよう。脚部高指数に着目



第3図 鼓形器台の法量

すると、脚部高指数が0.8を下回るもの、すなわち脚部高が低い一群が存在する(中形c)。脚部高指数が0.8を下回るものはほぼ無稜タイプに限られることから、脚部高の縮小は無稜タイプ出現以降に起こる変化であると評価できよう。

したがって、当地域で鼓形器台の時期を示す要素は、①器高の縮小、②無稜タイプの出現、③脚部高の縮小、であり、これらが跛行的に進行したと考えておきたい。なお、小形品は無稜で脚部高が低いもののみであり、規範を逸脱した末期的な要素と考えられる。

小形器種の共存関係 以上の検討から、付表には、一括資料中の小形器種の共存関係を示した。なお、小形丸底壺は出現当初から、内外面に細ミガキを施すもの(畿内におけるI群系統のもの)と、外面をミガキないしハケメ、内面をハケメないしケズリで仕上げるもの(山陰系統あるいは畿内のII群系統)の2種が存在するが、量的には後者が圧倒的に多い。小形丸底壺は系統による差異はあるものの、器高に対する口縁部高の比率が時期差を反映すると考えられるため、参考としてその指数を合わせて示している。付表から、先に示した各型式の変化の方向性と矛盾なく、それぞれの資料が組列できることが分かる。また、多くの系統が混在する状況から、次第に山陰系統に収斂されていく状況も看取できよう。壺・甕等の大形の容器類は今回の表には反映していないが、第4～7図で示すように、小形器種と同様、山陰系統の土器群に収斂されていくと考えられる。

付表 小形機種の共存関係と一括資料の位置付け

遺跡	遺構	一括性 (※1)	在来系統										中期的 有段高杯	小丸 指数 (※2)	第4 と7 因の 番号	文 献 (※3)	編年の対応関係 (注8、※4)						
			在来系統		北陸系統		畿内系統		山陰系統		無段高杯						丹後半島	畿内	山陰	北陸			
			小形 器台	高 器台	短 脚 高 杯	有 段 口 鉢 器 台	X 形 器 台	短 脚 高 杯	小 形 器 台	有 段 高 杯	有 段 高 杯	無 段 高 杯											
大田南5号	第1主体墓壇上	○	1	1	1								1	1		3~8	神山町教委 1998	Ⅲ 期	浅後 谷南	古段階 古粗/ 布留0 新	小谷1 草田6 (新)	漆町7	
明石大跡山D12号墳	墓壇上	○		2										2		9~16	加悦町教委 2003・2004						
島津遠慮17号	土器棺	◎														1・2	府セ概71						
志高(舟戸南)	自然流路土器溜	△														27・28	府セ報12	Ⅳ 期	古段階 新粗/ 布留1 古	小谷2	漆町8		
志高(舟戸南)	自然流路下層土器群	△	3	1				1	1						19~26	府セ報12							
志高(舟戸北)	S K86126	△	1	1											17・18	府セ報12							
川向3号墳	墓壇上	○	1		1										29・30	府セ概87							
古殿3次	SD301	△													31~33	府セ報9	Ⅴ 期(古)	霧ヶ島	中段階 古粗/ 布留1 中	小谷3 (古)	漆町9		
明石愛宕山3号墳		×	1					2	4						38~44	加悦町史							
茶臼ヶ岳5号墳	土器棺1	◎			1										37	府セ報131							
茶臼ヶ岳5号墳	土器棺2	◎								1					34~36	府セ報131							
東禅寺1号墳	第1主体	◎						2							57	府セ概104							
茶臼ヶ岳6号墳	土器溜まり	○								2	1				45~50	府セ報131							
谷典13号墳	墓壇上	○					1	1							51~53	府セ報128							
谷典10号墳	土器棺	◎													54	府セ報128							
蛭子山1号墳	墳頂土器群	○				1	○								55・56	加悦町史							
堤谷B5号墳	第1主体	◎								1					58~60	府セ概55							
北谷1号墳	墓壇上	△			2	1	5	1	1						61~66	府セ概65	Ⅵ 期	北谷	中段階 新粗/ 布留2 (古)	小谷3 (新)	漆町10		
浅後谷南	S D2012 (本體內・周辺)	△					1	2	2						67~71	府セ概93							
権現山古墳	GM2	◎						1	1	1					72・73	久美浜町教委 1984							
権現山古墳	GM3	◎									1					久美浜町教委 1984							
古殿3次	S D304	△			1	1	1	1							0.27	府セ報9							
権現山古墳	GM5	◎					1	1	2	1						久美浜町教委 1984							
大田南4号	第2主体	○															80~82	府セ概55	Ⅶ 期	神明山	新段階 古粗/ 布留2 (新)	小谷4	漆町11
堤谷B10号墳	墓壇上	○								1	1	1											
通り3号墳	第1・3主体	◎			2					1								府セ概50					
左坂B2号墳	第3主体	○								1	1				0.54	府セ概50							
神明山古墳	前方部	×								1	4				0.46	丹後町教委 1983							
大將軍	S X01	○						1	1	1	1	1	1	0.32	89~97	網野町教委 2001	Ⅷ 期(古)	大田南	新段階 新粗/ 布留3	漆町12			
林	4号住居址	△										1		0.27	83~86	網野町教委 1977							
古殿3次	SX301	○								1					87・88	府セ報9							
大田南6号	墓壇上	○					1	4		5	1			0.38	102~110	神山町教委 1998							
山田黒田	3r13層	△									1			0.42		府セ概106							
白米山古墳	墳丘上pit 9	◎												1	98~101	加悦町教委 1999							
作山1号墳	墳頂面礎敷帯	○								1				1	112~116	加悦町史	Ⅸ 期		大角山 古段階				
作山2号墳		△																					
作山3号墳	墳頂面南側	○													111	加悦町史							

※1 ◎:極めて一括性が高く、混入の余地がほぼない ○:出土状況の一括性は高いが、混入の余地が残る △:混入の余地あり、× 出土状況不明
 ※2 小丸指数とは、小形丸底壺の【口縁部高/器高】の比率を示す。複数個体が出土している場合は、その平均値を記す。
 ※3 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター及び京都府教育委員会刊行の文献は、以下のように示した。
 府セ概●:京都府遺跡調査概報第●冊、府セ報▲:京都府遺跡調査報告書第▲冊/京都府遺跡調査報告集第▲集、
 京都府埋蔵文化財調査概要◆年度:府教委◆
 自治体の調査報告書は発行機関および出版年のみ記し、詳細は割愛した。ご寛容願いたい。
 ※4 高野2003との対応関係は、高野が各期の基準資料として提示した資料との関係を示した。また、北陸との並行関係は、注9市村論文を参考とした。

4 土器編年試案と土器様相についての予察

以上のことから、弥生時代終末期から古墳時代前期を、前稿と合わせ1～9期の大別9期、都合12期に区分する案を提示しておきたい。以下ではその概略を示しておこう。

4期 4期は、丹後半島での資料が少なく、様相が不明瞭である。ここでは、舞鶴市の川向3号墳と志高遺跡の資料をあげた。容器類は典型的な布留形甕と布留系直口壺が出現している一方、山陰系二重口縁壺や、日本海東部系と考えられる「く」の字甕も残存する。器台は、在来系統の小形器台Cのほか、器高が縮小した鼓形器台が認められる。

5期(古) 4期までは認められた北陸系統の土器群はほぼ終息し、在来系統も小形の器台がわずかに残存するのみである。高杯では杯部径の大きい山陰系高杯が明確に出現する。愛宕山3号墳は出土状況がはっきりしないが、X字形器台や有段口縁鉢が伴うなど、畿内系統の小形器種が揃う。これは当該期の様相とみるべきなのか、あるいは遺構による差異なのかは判断できないが、山陰系統と畿内系統の土器群にほぼ収斂される。

5期(新) この段階は、5期の基準資料と6期の基準とした北谷1号墳との過渡的様相として設定した。様式的には新たな展開は見られないが、山陰系統の高杯は杯部の縮小が認められ、二重口縁壺も二次口縁部の外反傾向が顕著となる。

6期 北谷1号墳出土土器を基準とする。高杯では長脚のものが出現し、以降主流となる。山陰系統の土器群では鼓形器台に無稜のいわゆる開地谷型が出現する。小形X字形器台は、器高が低い最終形態のものがあり、布留式中段階でも新しい様相と考える。

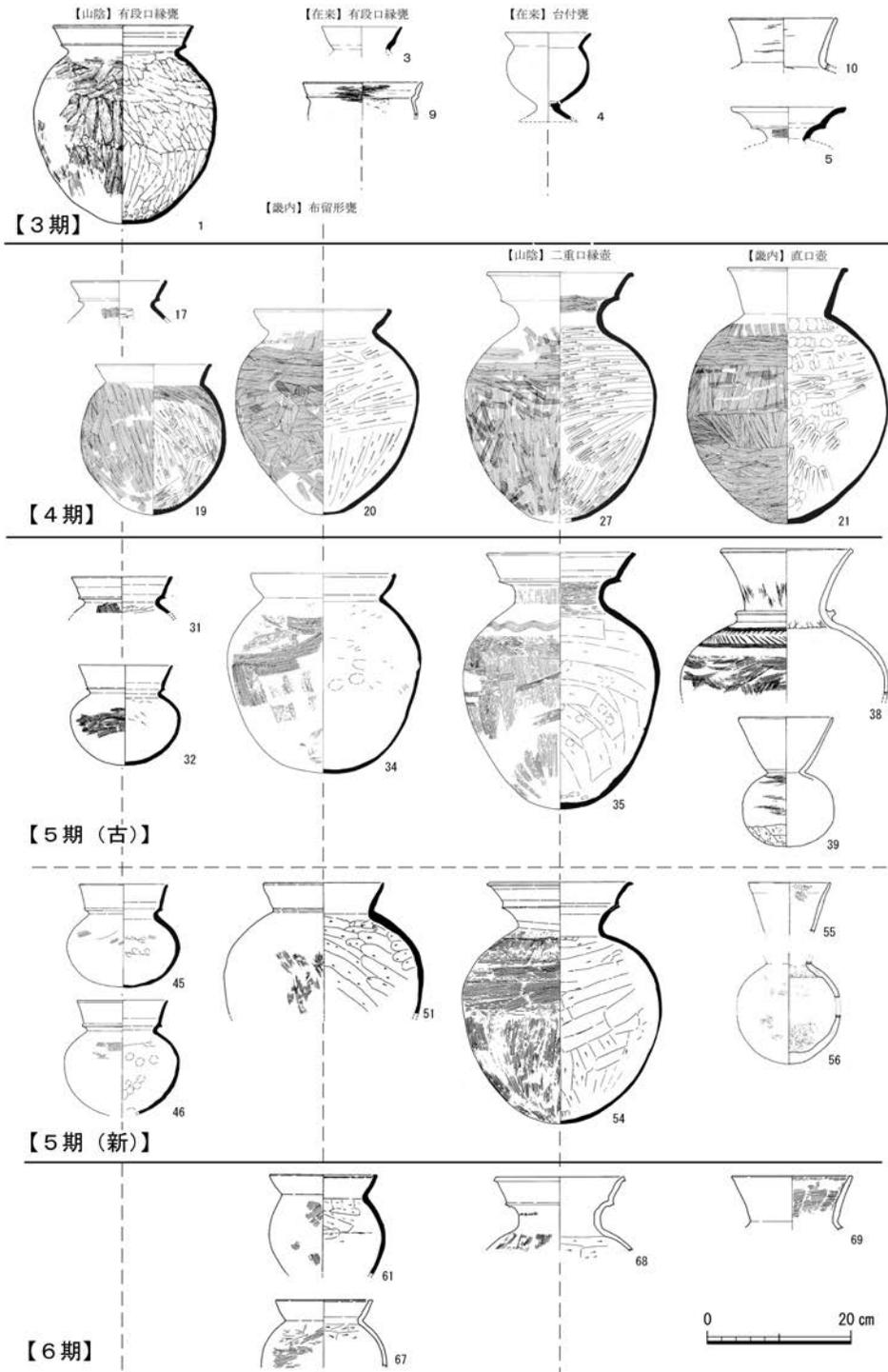
7期 高杯は長脚の山陰系統のもののみとなる。鼓形器台が無稜のものが主流となり、規範を逸脱した大形や小形のものも認められる。畿内系統の器台は減少し、小形丸底壺はハケメ調整のものが大多数となる。山陰系二重口縁壺は6期までは山陰地域とはほぼ同じような変化を追うことができるが、7期以降は肩部が極端に張った型式となる。

8期 7期まで認められた畿内系統の土器群がほぼ認められなくなり、山陰系統土器群に収斂される段階である。なお、小形丸底壺や山陰系統(Ⅱ群)高杯は布留式にも普遍的に認められるが、両者を明確に区分することはできない。鼓形器台は脚部高が低いものが出現する。また、中期的な杯部に稜を持つ高杯もこの段階で出現すると考えられる。この時期に確実に須恵器を伴う例は丹後半島ではないが、新段階にはすでに須恵器が出現している可能性が高い。

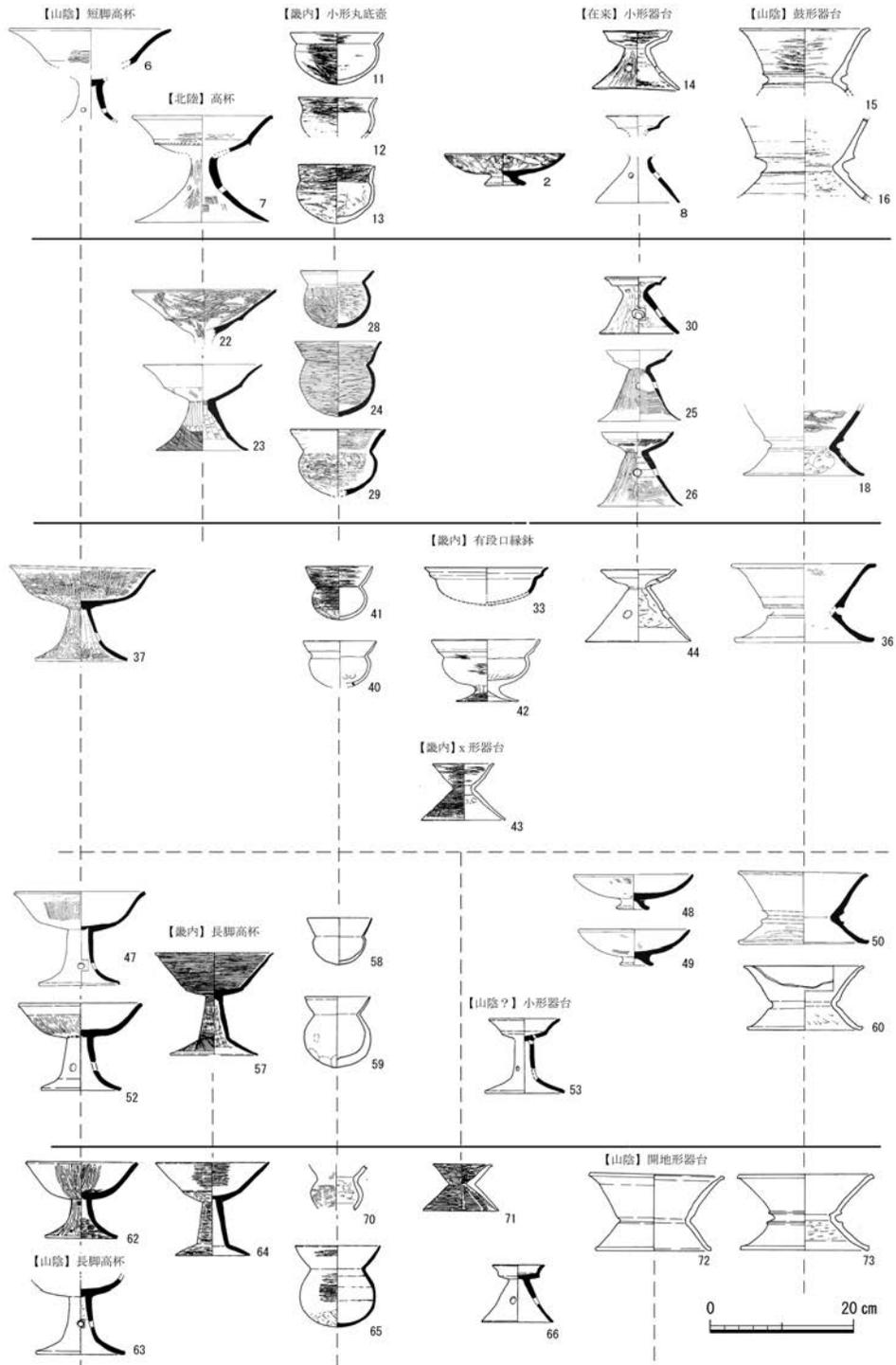
9期 9期は8期で認められた器種組成と変化はない。鼓形器台は中形のものが消滅し、小形のもののみとなり、小形丸底壺も壺形態のもののみとなる。

なお、これらの土器群は系統の消長・共存関係から付表のように4大別して整理できる。

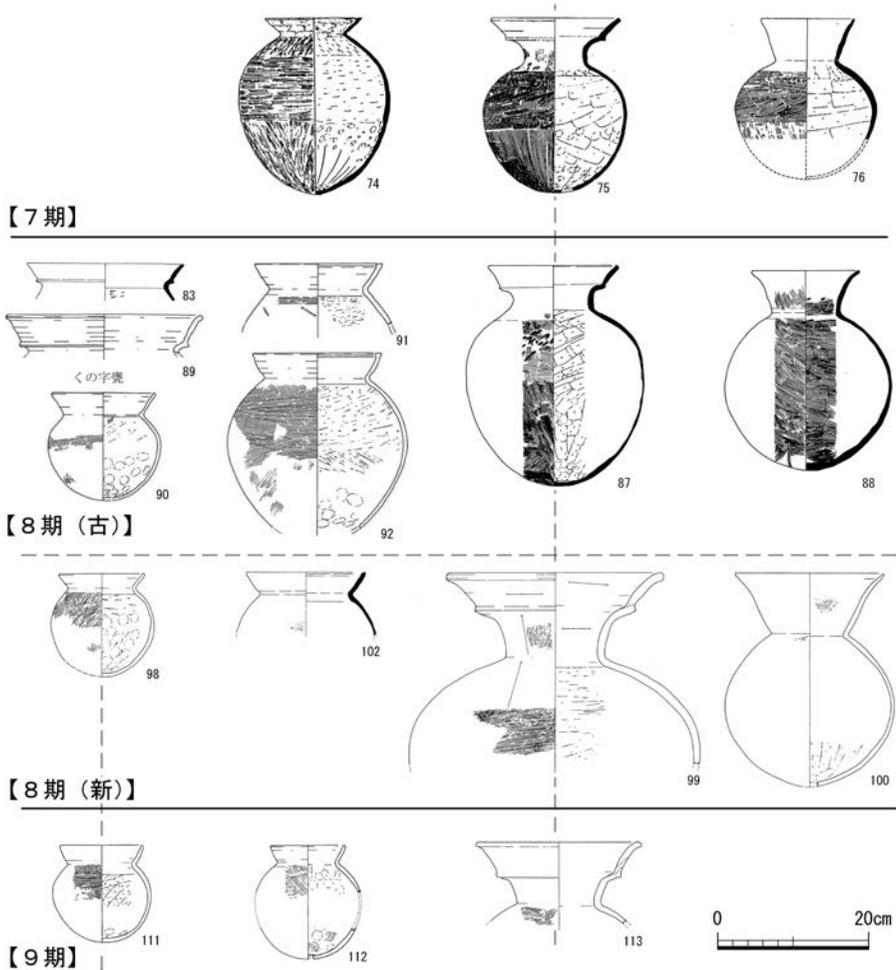
1～3期は在来系統の擬凹線文土器様式の解体に伴い、各系統の土器が混在する時期で



第4図 丹後半島における古墳時代前期の土器編年(1)



第5図 丹後半島における古墳時代前期の土器編年(2)



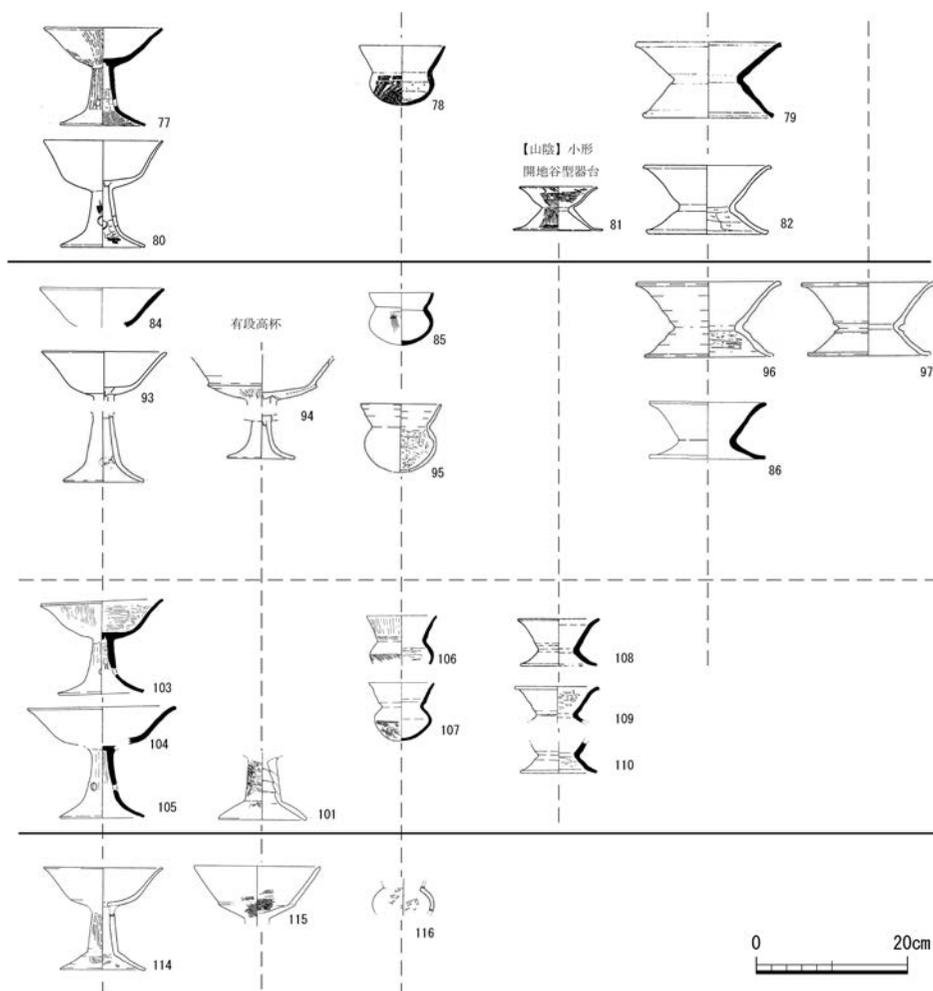
第6図 丹後半島における古墳時代前期の土器編年(3)

あり、従来の浅後谷南式に当たる。在来系統の土器としては、小形器台が5期まで残る以外は、基本的には3期までで多くの器種が消滅する。

4・5期は北陸系統の土器が衰退し、畿内・山陰系統の土器が主体となる時期である。この段階では両者は区別可能である場合も多く、高杯や壺類、小形器種などで2系統の土器群が併存する。畿内系は定型化した布留式のセットが揃う。なお、霧ヶ鼻式とされた資料は3～7期に渡るが、厳密に同時性のある資料が少なかったことによる認識だろう。

6・7期は畿内系統の土器群の様相が薄れ、山陰系統の土器が主流となる。この段階では両者の区別が困難なものも増加し、器種も限定的となる。高野は北谷式・神明山式にあたるこの段階以降を後期布留様式としており、前期における土器様式の変換点である。

8・9期は山陰系統の土器群を素地としつつも、独自の型式変化を想定できる時期であ



第7図 丹後半島における古墳時代前期の土器編年(4)

る。肩部が張った壺類や、無稜の鼓形器台の盛行は、山陰系土器群が変容した状況ととらえられよう。須恵器は共伴しないが、高杯や甕に中期的要素が認められるようになる。

このように、弥生時代終末期に流入した多系統の土器群が次第に収斂され、中期へと向かっていくのが当地域の土器様相の特質である。前期前葉には、個別の器種の変化は周辺諸地域と歩調を合わせおり、広域で技術的交流は保持されていたとみられる。一方、6期あたりを境として、製作技術の混交あるいは変容が顕著となり、周辺地域ともやや異なった変化を見せる。この時期は、畿内でも土器製作技術の変容と粗雑化が指摘されており、前段階までに形成された斉一的な土器様式の変容期に当たる。^(注10) 当地域においても土器製作技術の共有関係は前段階と比較して低調となり、地域性の萌芽が認められる。畿内・山陰・北陸といった個性の強い土器様式圏に接する当地域では、この傾向を明確にとらえること

ができる。今後小地域内での検討が進めば、この具体相も明らかになるう。

6 おわりに

本論では、これまで不明瞭であった丹後半島の古墳時代前期の土器様相について検討を行った。個別の器種の型式変化については他地域の研究に依拠した予察的な検討に終始したが、一定の方向性を示すことができた。現在、丹後半島周辺では京都縦貫自動車道の延伸工事に伴って再び調査件数が増加傾向にあり、低地部の資料も増加することが期待される。本論をたたき台として、当地域の土器様相の検討が進展することを期待したい。

なお、資料調査では京丹後市教育委員会、宮津市教育委員会に便宜をはかっていただいた。また、東日本古墳確立期土器研究会の皆様には多くの助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

(きりい・りき = 京都府教育庁指導部文化財保護課主任)

- 注1 桐井理揮2020「擬凹線土器様式の解体―浅後谷南式の再検討―」『京都府埋蔵文化財情報』第138号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、以下前稿とする。
- 注2 高野陽子2006「丹後地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 注3 高野陽子2003「北近畿における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相」『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』(財)大阪府文化財センター
- 注4 次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究会』第40巻第2号 考古学研究会、三好玄2010「布留式土器様式構造の再検討―精製器種を中心に―」『待兼山考古学論集』Ⅱ―大阪大学考古学研究室開設20周年記念論集― 大阪大学考古学研究室
- 注5 三好玄2007「高杯形土器における布留式土器定型化の様相」『古墳出現期土器研究』第1号 古墳出現期土器研究会、松山智弘2015「山陰」『前期古墳編年を再考する』Ⅱ―古墳出土土器をめぐって―発表要旨集・資料集 中国四国前方後円墳研究会、本文中の山陰の編年観は当文献に拠る。
- 注6 西村歩2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の撰津・河内・和泉と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム8 香芝市二上山博物館、本文中の畿内の編年観は当文献に拠る。
- 注7 前掲注5、松山2015
- 注8 神明山古墳出土の4点は、脚部高は高いが、器高はやや低い特異な一群である。評価が難しいが、小形品出現前の過渡の様相とみておきたい。
- 注9 市村慎太郎2019・2020「中河内からみた庄内・布留式における列島各地との並行関係の整理(1)(2)」『古墳出現期土器研究』第6・7号 古墳出現期土器研究会、田島明人1986「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡』石川県教育委員会、田島明人2008「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(1)」『石川県埋蔵文化財情報』第20号(財)石川県埋蔵文化財センター、および前掲文献
- 注10 笹栗拓2019「布留式土器の変容過程―八尾市佐堂遺跡と茨木市総持寺遺跡出土資料の分析―」(『大阪文化誌』第52号(公財)大阪府文化財センター